

2022 年度

修士論文要旨

(精神分析学研究演習Ⅱ)

(大橋 良枝 教授)

ライフイベントが青年期の愛着スタイル

に及ぼす影響について

—重要他者のメンタライジング能力の

調整効果に着目して—

聖学院大学大学院

心理福祉学研究科

心理福祉学専攻（修士課程）

学籍番号 121ms002

名前 栞原有生

問題と目的

Bowlby (1969, 1973, 1980) により提唱された愛着理論は、養育者と子どもの中に構築される心理的な経験を扱うものであり、愛着という用語は子どもと養育者の情緒的な絆を示すものとして用いられることが多い。愛着理論の中で、重要となる概念が Bowlby

(1969, 1973, 1980) による内的作業モデル (Internal Working Model :以下 IWM とする) である。IWM から Hazan&Shaver (1987) が青年・成人期の愛着理論を提唱し、青年・成人期の愛着の質を実証的に見るようになってきた。

先行研究では、金政 (2007) の研究で、母親の愛着スタイルと青年期の愛着スタイル間に相関関係が認められたが、弱い相関関係であったため、金政 (2007) は、必ずしも、愛着スタイルが不可逆的なものではないこと、常に変容する可能性を秘めていることを考察した。

そこで、愛着が変容する可能性として考えられるのが、メンタライジング能力である (上地, 2015)。メンタライジングとは、主観的な状態や心的プロセスの観点から、暗黙的にも明示的にも相手や自分自身を理解するプロセスとされている (Bateman&Fonagy, 2013)。メンタライジング能力と愛着の安定性に関する Arnott & Meins (2007) の研究では、親のメンタライジング能力と愛着の安定性について関連が認められており、親の子どもに対する適切なコメントが、生後 12 か月時点の子どもの愛着の安定性を予測するものとなっていた。また、愛着スタイルに影響があるものとして、ライフイベントがある。川本ら (2018) の 6 か月の期間を経て、愛着スタイルの変容にどのように影響するかを検討した研究からライフイベントは、愛着の変容する因子とは、なりえないが、愛着スタイルに影響を及ぼすことが確認されたのである。よって、ライフイベントも愛着に影響を及ぼすと考えられる。

以上のことから、ライフイベントと青年期の愛着スタイルに重要他者のメンタライジング能力が影響しているのか検討することとする。

仮説として、親の愛着安定性が重要他者のメンタライジング能力の調整効果によって恋人や友人の愛着の安定性に影響するであろう。また、ネガティブライフイベントが重要他者のメンタライジング能力の調整効果によって、恋人や友人の愛着の安定性に影響することが考えられる。

方法

調査期間は 2022 年の 7~12 月であった。首都圏の私立大学 2 校にて、青年期に該当する大学生と調査協力者の重要他者に調査を行った。

調査手続きとして、調査協力者には、対面での集合調査法で行い、調査協力者の重要他者

には, Google form によるインターネット調査を行った。

質問紙の構成として, デモグラフィックな質問を問うフェイスシート, 愛着スタイルを測定するために, Fraley らによって作成した ECR-RS を古村ら (2016) が邦訳したアダルト・アタッチメント・スタイル尺度日本語版, ライフイベントを測定するものとして高比良 (1998) が作成した大学生用対人・達成領域別ライフイベント尺度短縮版, Greenberg らが作成した Mentalized Affectivity Scale を馬場ら (2021) が邦訳したメンタライズされた感情認識尺度日本語版によって構成されていた。

本研究は, 聖学院大学研究倫理審査委員会 (2022 年 5 月 31 日第 2202-05b 号) の承認を得た。

結果と考察

仮説を検討するため, step1 に年齢, 性別, 重要他者の年齢, 重要他者の性別, 重要他者の関係に親の愛着スタイルの 1 因子とライフイベントの 1 因子, 重要他者のメンタライジング能力を 1 因子, 説明変数として投入し, step2 に親の愛着スタイルと重要他者のメンタライジング能力, ライフイベントと重要他者のメンタライジング能力の交互作用項を加えた階層的重回帰分析を行った。その結果, 友人の不安を従属変数とした階層的重回帰分析で, 対人領域のネガティブライフイベントと感情の表出不全の交互作用効果 ($t(17) = 2.28, \beta = .33, p = .024$) と父親の回避と感情の表出不全の交互作用効果 ($t(13) = 2.97, \beta = -.73$) に有意な値がみられた。以上の結果から, 愛着に関する仮説は支持されなかったがライフイベントに関する仮説は部分的に支持された。

父親の回避と感情の表出不全に交互作用効果があったことの結果からは, 感情を出すかどうか自分の中で再確認する重要他者 (メンタライジング能力が高い) であるかよりも父親が頼れるかどうかということが重要である可能性が示唆された。また, 対人領域のネガティブライフイベントと感情の表出不全に交互作用効果があったことの結果からは, 対人関係の嫌な出来事が起こったとしても重要他者が感情を出すかどうか自分の中で再確認することが出来る人であれば, 出来ない人が重要他者であるよりも, 友人へ見捨てられるのではという不安になる気持ちは強くないことが示唆されたため, 感情の表出不全はメンタライジング能力の中でも重要な要素である可能性が示唆される結果となった。

今後の課題として, 重要他者のサンプル数を増やし, 縦断的な研究を行うことによって愛着の変容を多角的な視点から分析を行い, 精度を上げていくことが求められる。

聖学院大学大学院

心理福祉学研究科

心理福祉学専攻（修士課程）

学籍番号 121ms002

名前 栞原有生